

小林正人 『「景気循環」研究 序説—資本主義経済において景気循環は必然的か—』
2010年 駒澤大学経済学論集 42(2)

- 序言 1
 - ✓ 大量の過剰設備と大量の非自発的失業者の並存状態こそ恐慌または不況の最大の特徴
 - ✓ 設備投資による生産能力拡大と需要のスパイラル的変動の相対的關係によって好況は不況に反転
 - 並存状態が発生
 - ✓ 景気循環の「きっかけ」と「原因」の違いを区別する
 - 「原因」には生産設備を固定資本として運用する場合の利潤原理が内在
- 1.1 景気循環の概要 2
 - ✓ 景気循環 (business cycles) とそれによって周期的に起こる大量の失業者の発生
 - ✓ 景気循環の周期は大きく2つ、好況期と不況期に分けられる
 - 好況期は循環の谷からの回復期、循環の山へと上がっていく高揚期に分けられる
 - 不況期は山から転落する恐慌期、谷へとさらに落ちていく沈滞期に分けられる
 - ✓ 生産財および消費財の市場と金融証券市場との区別、連関
 - ✓ 生産財や消費財の供給にかかわる産業や企業のあいだの相互依存、相互波及関係
 - 需要の「拡大スパイラル」と「縮小スパイラル」
 - ✓ 景気が沈滞期から回復期に移行するためには設備投資需要が必要
- 1.2 不況のきっかけ、とくにバブルの崩壊 4
 - ✓ 資本主義経済のメカニズムとして好況が不況に反転するのはなぜ？
 - 日本経済は外国市場の不況、公定歩合引き上げなど様々なきっかけによる不況を経験しているが、ここでは特に株価の暴落や地価の反落について言及
 - ✓ 投資家たちはバブル期においては、元来の資産価格の高低による行動ではなく資産価格の変化率によって行動する
 - 投資行動そのものが価格の上昇を引き起こし、それが持続する
 - ✓ 一斉に投資家たちが売り抜けしようとするとう資産価格は暴落し不況につながる
 - ✓ 好況を不況に反転させるきっかけと真の原因の解明
- 1.3 設備投資と景気変動 6
 - ✓ 好況期に企業は自由な利潤見通しで設備投資を行う
 - 不況期では過剰設備になる
 - ✓ 不況期では大量の不良在庫を出したり、閉店などで全体の生産能力が落ちることで稼働率の上昇へとつながる
 - ✓ 設備投資は少額で行われるものではなく、採算が取れ(利潤が得られ)、なおかつ同業他社に対して競争力を持てるだけの金額を一気に投資しなければならない
- 1.4 設備投資と減価償却 9
 - ✓ 減価償却とは、生産設備にかけた費用をその耐用年数の間に回収するための会計的処理
 - ✓ 資本主義経済で生産設備を運用するには二つの経済的課題が存在
 - 1. 耐用年数中に設備を使って商品を製造・販売し続けて減価償却を完了させる
 - 2. 耐用年数の間に投資に見合った利潤を獲得し続ける
 - このような資本主義的形態をまとった生産設備を「固定資本」と呼ぶ

- ✓ 上記の二つの課題を克服できない場合→倒産のリスク↑
 - 慎重な需要予測に基づく設備投資（生産能力の拡大）が必要
 - しかし、需要予測はもちろん、他社の自由放任行動による不確実性の高さ
- ✓ 経営者が設備投資を構想するのは、需要変化率 >0 であり、その場合はある程度の生産設備が産業部門に林立される
 - しかし需要が反転すると、設備投資を取りやめる企業が続出し、「拡大スパイラル」は「縮小スパイラル」へと転ずる
 - 既に設備投資が行われている場合、過剰設備に変身
- 1.5 不況の初期または恐慌 11
 - ✓ 減産すれば販売額が減り投資回収予定が破綻、稼働率の引き下げは利潤の減少に直結
 - 経営者としては稼働率を高め維持する必要がある
 - 大幅な値引きで競合他社から市場を奪い、生産量と販売量を維持
 - ✓ 自企業の損失の回避（稼働率維持）が業種全体の落ち込みを引き起こす
 - 需要は「縮小スパイラル」へ突入し、稼働率を維持できる企業のみが生き残る
 - 需要と生産能力の両方が縮小する停滞期へ
- 1.6 設備投資と懐妊期間 12
 - ✓ 設備投資をする上では懐妊期間という構想から稼働開始までの準備期間が必要
 - 設備投資を行う上では需要予測が不可欠であるが、懐妊期間の間に需要は変動する
 - ✓ 生産能力の上昇は段階的であり、懐妊期間の存在から、好況期であっても生産能力と需要が一致せず、生産能力の方が上回ることが起こりうる
- 1.7 需要の拡大スパイラルと縮小スパイラルの比較 13
 - ✓ 景気沈滞期において自律的に回復期へ移行するには設備投資が必須
 - ✓ 企業の設備投資を引き起こすためには現状の設備のフル稼働（或いはそれに近い状況）と、設備投資に回収の目途が立たねばならない
 - 検討の結果設備投資が行われると、企業間の取引ネットワークにより波及効果発生
 - 関連企業の雇用を生み、労働者に賃金が回る→消費需要の拡大へ
 - ✓ 需要拡大が更なる設備投資を誘発すれば、需要拡大スパイラルへ突入、景気は高揚期へ
 - ✓ 好況期において高収益の企業は銀行にとって理想的な融資先
 - 資金調達が容易になる信用拡大スパイラルへ
 - ✓ 景気拡大スパイラルの反転のきっかけは国の経済を一気に縮小させるような出来事
 - 見通しが急激に悪くなること（遊休設備のリスク高）で需要予測が大幅に悪化
 - 設備投資中止、規模縮小につながり、ネットワークによって縮小スパイラル波及
 - 縮小スパイラルの波及は個々の経営者の利潤動機の連鎖反応によって起こる
 - ✓ 縮小スパイラルは拡大スパイラルの経済原理が逆向きに起こることで発生
 - 需要変化率 <0 の持続
 - ✓ 縮小スパイラル時の金融資産取引は投資家の一斉の株売却によって株価悪化
 - 信用拡大と反対の信用収縮発生→倒産や失業の増大へ